大阪体育大学紀要
第36巻（2005）pp.84–94

原著論文

女性のスポーツ参与阻害要因に関する研究Ⅱ

—12歳以下の子供を持つ母親のスポーツ観戦者行動について—

藤本 淳也, 松永 敬子, 松岡 宏高*, 小笠原悦子**

2004年10月31日受付

A Study on the Obstruction Factors Affecting Women's Sports Involvement Ⅱ : Focusing on Sports Spectator Behavior of Mothers with Twelve Years Old Children and Under

Junya Fujimoto, Keiko Matsunaga, Hirotaka Matsuoka*, Etsuko Ogasawara**

Abstract

The purpose of this study was to examine the factors affecting the sports spectator behavior of mothers with twelve years old children and under. Surveys were conducted at a professional baseball game at the Green Stadium Kobe on August 26th, 2001, and at a J-league game at the Tokyo Stadium on November 11th, 2001. The number of effective responses from mothers with twelve years old children and under were 168 and 107, respectively. Respondents were divided into three segments according to the age of their youngest child : a 0-3 year old segment (n=65), a 4-6 year old segment (n=84), and a 7-12 year old segment (n=136). The obstruction factors affecting mothers' sports spectator behavior were compared among the three segments. The results were as follows.

1) The obstruction factors related to stadium facilities and services were different among the three segments. Mothers with 0-3 year old children, in particular, noted some factors, such as "there is no diaper changing place," "there is no place for breastfeeding," and "movement in the stadium is inconvenient."
2) The obstruction factors related to the socio-psychological aspects of the mothers were different among the three segments. Mothers with 0-3 year old children felt "guilty leaving my child with someone" and noted "it is difficult to leave a child with someone to attend a game at the stadium." On the other hand, mothers with 4-6 year old children recognized "problems with going to the stadium with children," such as "causing trouble for other spectators" and "not being able to enjoy the game personally."

*びわこ成蹊スポーツ大学　**NPO法人ジュース

1. 緒言と目的

現在、女性の運動、スポーツ、そして健康に関する関心が国際的に高まってきている。例えば、WHO（2001）は「身体活動と女性の健康」という声明の中で、女性の定期的な身体運動実施者の乳癌発生率の低さを指摘するとともに、非実施者は実施者と比べて骨粗鬆症の危険率が高く、骨折の可能性も高いことを報告した。また、Haapasalo（1999）は、女性の身体活動は思春期に低迷化する傾向があり、発展途上国や人口集中都市の貧困地帯ではこの傾向がさらに高まることを示した。さらに、国際的スポーツ組織も女性スポーツに関する具体的なアクションを起こし始めている。例えば、国際オリンピック委員会（IOC）は、1999年に採択した行動計画である「オリンピック・ムーブメント・アジェンダ21」の中に「女性役割の向上」という項目を明記した。この中で、特に女性のスポーツ参加を促すために、託児所を設置するなどの社会的手段を講じる手助けをすること等について、具体的に明記されている点は興味深い。

日本においては、2000年に閣議決定された「男女共同参画基本計画」の第8章「生涯を通じた女性の健康支援」の中に「女性の生涯にわたるスポーツ活動の推進」が盛り込まれ、女性のスポーツ活動推進の重要性が指摘された。しかし、現在では「するスポーツ」と「みるスポーツ」共に、男性と比較して女性がスポーツ活動に関わるスポーツ参与レベルは低い傾向にある。SSF笹川スポーツ財団の「スポーツライフデータ2002」（2002）によると、過去一年間に全く運動・スポーツをしなかった女性の割合は36.9％で、男性（26.9％）を大きく上回っている。また、過去一年間のスタジアムでのスポーツ観戦率は、男性の33.8％に対して女性は21.7％と低い傾向にある。

一方、女性のスポーツ参加やスポーツ観戦に対する潜在的需要は比較的大きい。レジャー白書（1998）によると、女性の自由時間の使い方について現在の活動率と今後の希望率を比較すると、「スポーツ活動」と「スポーツ観戦」共に活動率よりも希望率の方が高い値を示している。つまり、現在よりもスポーツ活動やスポーツ観戦を実施したいと思っている女性が多いことがわかる。さらに、この傾向は、子育て期の女性においては顕著であり、フルタイムで働く子育て期の女性の場合、「スポーツ活動」と「スポーツ観戦」の潜在需要は21.0％と5.7％で、「スポーツ活動」が女性全体の平均より明らかに高いことを示した。また、子育て期の専業主婦においては「スポーツ活動」と「スポーツ観戦」の潜在需要は21.1％と9.6％と、それぞれ女性全体の平均よりも明らかに高い値を示した。

このように女性のスポーツ参加および観戦の現状においては、「子育て」が女性のスポーツ参与に対する阻害要因と関連していると推察される。実際に、「子供にかかりきりで時間的な余裕がない」と思っている者の割合は、男性（27.7％）よりも女性（59.1％）の方が明らかに高く、「子供がいるために、趣味などを気軽に楽しめない」についても同じ傾向が指摘されている（男性30.4％、女性43.6％）（こども未来財団、2001）。また、同様にこれらの「子育て」に関わる要因のスポーツ参与に対する影響は、末子の年齢によって異なり、特に、未就学児を持つ女性においてその影響が顕著であると報告している。女性のスポーツ参与レベルを高め、スポーツ参加やスポーツ観戦への機会を提供していくためには、特に「子育て期」の女性が抱える課題を明らかにし、解決へ向けての具体的な方策を立案および展開していくことが重要といえる。「女性のスポーツ参与阻害要因に関する研究Ｉ」では、6歳以下の子供を持つ母親のスポーツ活動参加に焦点をあて、スポーツ活動参加の阻害要因を指摘した。本研究では、12歳以下の子供を持つ母親のスポーツ観戦者行動に焦点をあてる。

本研究の目的は、スポーツ観戦に焦点をあて、12歳以下の子供を持つ母親のスポーツ観戦阻害要因を明らかにすることである。具体的には、子供の年齢とスポーツ観戦阻害要因との関連を探るためスタジアム施設要因、スタジアムサービス要因、そして社会心理的要因について、末子年齢セグメント間で比較分析を行う。

2. 研究方法

1） 調査対象施設の特性

本研究では、12歳以下の子供を持つ母親のスポーツ観戦者行動に注目しているため、調査の時点で託児関連サービスを展開しているスタジアムを調査地として選んだ。具体的には次のふたつである。

a） グリーンスタジアム神戸（プロ野球）

兵庫県神戸市須磨区のグリーンスタジアム神戸（2002年～2005年3月までは「ヤフーBBスタジアム」）は、神戸市営地下鉄「総合運動公園駅」から徒歩3分に位置し、約4,000台分の駐車場を完備、最大収容人員は35,000人である。

このスタジアムを本拠地とするオリックス・ブルーウェーブは、ファンサービスに関してプロ野球界の先駆的存在でもあり、1991年のフランチャイズ移転以降は特に力を入れている。観客にはファミリーも多く、子どもへのボールプレゼントや始球式、試合開始前のジュニア・クリニック等を実施すると共に、託児所とキッズ・プレイランドも設置している。本研究は、子どもを持つ母親が対象であるため、このようなファミリー、子ども向けのサービスを積極的に展開しているこの球団のホームスタジアムを調査地とした。

b） 東京スタジアム（Jリーグ）

東京都調布市にある東京スタジアム（2003年より「味の素スタジアム」に改称）は、京王線「飛田給駅」から徒歩5分に位置しており、駐車場は無く、最大収容人員は50,000人である。

このスタジアムをホームスタジアムとしているのは東京ヴェルディ1969とFC東京であり、今回は託児サービスを展開している東京ヴェルディ1969の協力を得た。Jリーグでは、リーグとチームが共にファンサービスに努めており、子どもやファミリーの観客も多い。その中で東京ヴェルディ1969は、2001年シーズンから東京スタジアムでのホームゲーム開催日に託児所を開設して、女性支援にも力を入れ始めた。本研究は、Jリーグ所属クラブの中からホームスタジアムで託児サービスを展開しているクラブのホームスタジアムとしてこのスタジアムを調査地とした。

2） データ収集法

a） プロ野球観戦者調査

調査対象は、グリーンスタジアム神戸でのプロ野球女性観戦者である。調査日は、2001年8月26日（日）のオリックス・ブルーウェーブ対千葉ロッテ・マリーンズ戦である。調査方法は、試合が始まる2時間前の開門と同時に、スタジアムに入場してきた女性に調査用紙を手渡しで配布した。配布に当たっては、オリックス・ブルーウェーブの担当者とのミーティングをもとに、内野エリアや外野エリア、自由席や指定席などの予測観戦者数を考慮し、各エリアの観戦者数比率をできる限り反映できるように配慮した。回収は、内野と外野にそれぞれ1ヶ所ずつ回収場所を設置し、記入後に提出を求めた。

380部を配布した結果、321部を回収（回収率84.5%）、そのうち12歳以下の子どもを持つ母親のみを有効回答とした（168部、有効回収率44.2%）。

b）Jリーグ観戦者調査

調査対象は、東京スタジアムでのJリーグ女性観戦者である。調査日は、2001年11月24日（土）の東京ヴェルディ1969対FC東京戦である。調査方法は、試合が始まる2時間前の開門と同時に、あらかじめトレーニングを受けた調査員がスタジアム内の座席で12歳以下の子供を持つことを確認した上で女性に調査用紙を直接手渡し、その場で回答を求め、回収した。配布に当たっては、東京ヴェルディ1969の担当者とのミーティングをもとに、メインスタンド、バックスタンドなどの予測観戦者数を考慮した。その結果、107部の有効回答が得られた。

3）調査内容

調査内容は、年齢、婚姻関係、子どもの人数、末子年齢、家族構成、職業などの個人的属性、観戦チケットの種類、スタジアムまでの所要時間と交通手段、過去の観戦経験、託児所の認知度などのスポーツ観戦関連項目、スポーツ観戦阻害要因項目、スポーツ観戦に関する自由記述である（表1参照）。スポーツ観戦阻害要因は、藤本（1999）やこども未来財団（2001）の報告を参考にスタジアム施設要因（6項目）、スタジアムサービス要因（3項目）、社会心理的要因（7項目）の合計16項目で構成した。これらの阻害要因の測定は、それぞれ「まったくそう思わない」と「非常にそう思う」を両極とする7段階尺度（ワーディングは両極のみ）を用いた。また、これらの項目がサービスの内容やその評価に関連する項目を含んでいることを考慮して、それぞれの項目の選択肢に「8：わからない」を設定した。

表1　調査項目一覧

1. 個人的属性
①年齢　②婚姻関係　③子供の人数　④末子年齢　⑤家族構成　⑥職業

2. スポーツ関連項目
①観戦チケットの種類、②スタジアムまでの所用時間、③交通手段、④今シーズンの観戦回数、⑤託児所の認知度

3. スポーツ観戦阻害要因項目
①スタジアム施設要因（6項目、7段階リッカート式尺度、ワーディングは両極のみ）
②スタジアムサービス要因（3項目、7段階リッカート式尺度、ワーディングは両極のみ）
③社会心理的要因（7項目、7段階リッカート式尺度、ワーディングは両極のみ）

4. 小学生以下の子供を持つ女性がスポーツ観戦を楽しむための条件など（自由記述）

4）分析方法

まず、プロ野球とJリーグのそれぞれの観戦者属性とスポーツ観戦関連特性を単純集計で把握した。次に、スポーツ観戦阻害要因（スタジアム施設・サービス要因、社会心理的要因）の分析では、ファミリー・ライフステージの違いによるスポーツ観戦というレジャー活動への影響を探るため、こども未来財団（2001）の分類を参考に「0－3歳」「4－6歳」「7－12歳」の3つの末子年齢セグメントに回答者を分類し、セグメント間で比較を行った。

分析は、スポーツ観戦阻害要因の測定に用いた7段階尺度にネガティブからポジティブに1点から7点の得点を与えて数量化を行い、3つのセグメント間で平均値を用いた比較分析を行った。また、各項目

において「8：わからない」と回答した者は、その項目の分析から除外した。分析上の平均値の差の検定には、一元配置分散分析を用いた。

なお、スタジアム施設要因とスタジアムサービス要因は、調査対象としたグリーンスタジアム神戸と東京スタジアムによって施設やサービスが異なるため、まず、それぞれの測定項目を両施設間で比較分析（t検定）を実施した。その結果、「託児施設が充実していない」（グリーンスタジアム神戸：平均値2.79、東京スタジアム：平均値3.49、t値＝2.37、p＜.05）と「子供が楽しめるイベントがない」（グリーンスタジアム神戸：平均値2.65、東京スタジアム：平均値3.59、t値＝4.67、p＜.001）の2項目において、ふたつの施設間で有意な差が認められた。この結果から、この2項目は子供を持つ母親が意識する一般的なスタジアムの施設・サービス関連要因ではなく、それぞれの施設の持つ施設・サービスの特徴と判断できる。したがって、末子年齢セグメント間の分析には、この2項目を除くスタジアム施設要因5項目とスタジアムサービス要因2項目を用いることとした。

最後に、自由記述法によって収集したスポーツ観戦に関する意見は、内容分析によって同類のカテゴリーに分類し、各カテゴリー別に回答された意見をまとめた。

3. 結果と考察

1） 回答者の特性

表2は、12歳以下の子供を持つ母親のプロ野球とJリーグの回答者属性を示している。年齢構成をみると、最も多いのはプロ野球とJリーグ共に「35～39歳」でそれぞれ43.6％と45.7％であるが、全体的にJリーグ観戦者の方が若干年齢層が高い傾向にある。子どもの人数はプロ野球とJリーグとも「2人」が最も多い。しかし、「一人」はJリーグ（29.4％）がプロ野球（13.6％）より高く、「3人」はプロ野球（23.5％）がJリーグ（10.8％）より高い値を示した。

次に、ファミリー・ライフサイクルのライフステージの指標を示す末子の年齢をみると、全体的に「7～12歳」の子どもを持つ者が最も多く（49.5％）、次いで「4～6歳（26.9％）」、「3歳以下（23.6％）」の順であった。

自宅での家族構成は、プロ野球とJリーグの回答者間で大きな違いは見られない。職業では、「有職」の割合がプロ野球（32.9％）の方がJリーグ（23.4％）より高く、「専業主婦」の割合は、Jリーグ（63.6％）の方がプロ野球（47.9％）より高い傾向が見られた。

表2　回答者の属性(%)

		プロ野球(n=168)	Jリーグ(n=107)	全体(n=275)
年齢構成	29歳以下	6.1	6.7	6.3
	30歳以上34歳以下	30.9	23.8	28.1
	35歳以上39歳以下	43.6	45.7	44.5
	40歳以上	19.4	23.8	21.1
子供の人数	1人	13.6	29.4	19.7
	2人	58.6	58.8	58.8
	3人	23.5	10.8	18.6
	4人	3.7	1.0	2.7
	5人	0.6	0.0	0.4
末子の年齢	3歳以下	22.0	26.2	23.6
	4歳以上6歳以下	28.0	25.2	26.9
	7歳以上12歳以下	50.0	48.6	49.5
自宅での家族構成	家族と同居	81.4	87.5	84.5
	家族と親と同居	16.8	12.5	15.2
	その他	1.8	0.0	1.1
現在の職業	有職(フルタイム)	15.6	12.1	14.2
	有職(パート・アルバイト)	32.9	23.4	29.2
	専業主婦	47.9	63.6	54.1
	その他	3.6	0.9	2.5

※ 表中の値は、各項目の列に対して100%である

2)　スポーツ観戦関連特性

表3は、スポーツ観戦関連特性を示している。観戦チケットの種類は、プロ野球では「当日券」が61.4%で最も多いのに対し、Jリーグでは93.3%の者が「前売り券」を購入している。自宅からスタジアムまでの所要時間では、Jリーグの方がプロ野球よりも若干長い時間をかけてスタジアムまで来ている傾向がみられ、その主な交通手段はプロ野球が「車（タクシー含む）(78.9%)」であるのに対し、Jリーグは「電車（54.2%)」「バス（20.0%)」であった。これは、それぞれのスタジアムの立地条件と駐車場整備状況の違いが反映されたものと考えられる。今シーズンの観戦回数では、プロ野球が「0回」と「1～3回以下」で約8割を閉めているのに対し、Jリーグでは全体の約4割が3回以上の観戦経験者となっている。

ふたつのスタジアムに共に設置されていた託児所の認知度については、プロ野球が25.7%、Jリーグが5.8%で、東京スタジアムでの認知度の低さが目立つ。これは、東京ヴェルディ1969がホームゲーム開催時に開設している託児所がサポーターズクラブ会員限定のサービスであり、告知が会員に限られていることが影響しているといえる。一方、グリーンスタジアムでは内野指定席と自由席の観客が託児所利用の対象者となるため東京スタジアムよりも認知度が高い。しかし、一般的にプロスポーツでは観客の4割が女性を占めることを考えると、決して高いとはいえない。

表3 スポーツ観戦関連特性(%)

		プロ野球(n=168)	Jリーグ(n=107)	全体(n=275)
観戦チケットの種類	シーズンチケット	19.6	1.0	12.2
	当日券	61.4	5.7	39.2
	前売り券	19.0	93.3	48.6
自宅からスタジアムまでの所要時間	30分以下	30.1	37.4	38.1
	31分以上60分以下	50.0	42.1	46.9
	61分90分以下	6.6	14.0	9.5
	91分以上	4.8	6.5	5.5
スタジアムまでの主な交通手段	徒歩	0.6	2.9	1.5
	自転車	1.8	12.4	5.9
	車(タクシー含む)	78.9	10.5	52.4
	電車	16.3	54.2	31.0
	バス	1.2	20.0	8.5
	その他	1.2	0.0	0.7
今シーズンの観戦回数(今日を除いて)	0回	30.1	23.6	27.5
	1回以上3回以下	49.7	34.0	43.5
	4回以上6回以下	10.4	18.8	13.8
	7回以上	9.8	23.6	15.2
託児所の認知度	知っている	25.7	5.8	18.1
	知らない	74.3	94.2	81.9

※ 表中の値は、各項目の列に対して100%である

3) スポーツ観戦阻害要因の末子年齢セグメント間分析の結果

a) スタジアム施設要因とスタジアムサービス要因

表4は、スタジアム施設要因とスタジアムサービス要因を末子年齢セグメント間で比較したものである。この分析には、調査地としたふたつの施設の回答者間で平均値に差が認められなかった項目、すなわち、スタジアムの施設とサービスの違いによる影響を受けていない項目のみを用いている。

3つの末子年齢セグメント間で比較した結果、すべての項目において有意な差が認められ、全体的に末子年齢が低い子供を持つ母親ほどこれらの要因を強く感じる傾向がみられた。最も大きな差が認められたのは「子連れで来ると施設の中での移動が不便である」で、次いで「子連れでの観戦をサポートするサービスが充実していない」、「子連れのスタジアムまでの移動が大変である」の順であった。したがって、低年齢の子供を持つ母親ほど、スタジアムまでの移動やスタジアム内での移動の不便さ、スタジアムでのサポート・サービスの充実度が、スタジアムでのプロスポーツ観戦の意思決定に影響を及ぼす可能性が高いと考えられる。

また、セグメント間の差は特に「4−6歳」と「7−12歳」の間で顕著であった。これは、「7−12歳」の子供は、自分で身の周りのほとんどのことができるようになる年齢で、スポーツ好きの子供であれば自ら試合観戦を楽しむことも期待できることが理由として考えられる。一方、「0−3歳」セグメントの方が「4−6歳」セグメントよりも高い値を示したことから、前者の方が施設面とサービス面の両方においてサポートを必要としていることが推察される。例えば、ベビーカー（乳母車）を必要とする年齢の子供をつれての観戦の場合、スタジアムまでの移動やスタジアム内での移動とベビーカーの置き場所などは、母親の気にする重要な事柄である。また、授乳やおむつ交換に関しても、実際にそれ

らの世話を必要とする年齢の子供を持つ母親にとって、レジャー活動を選択する上で重要な要因と考えられる。

表4　スタジアムの施設要因とサービス要因の末子年齢セグメント間比較分析の結果

	0-3歳 (n=65)		4-6歳 (n=74)		7-12歳 (n=136)		d.f.	f 値
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
<スタジアム施設要因>								
スタジアムにおむつ替えシートがない	3.41	2.33	3.11	2.04	2.15	1.33	121	4.71*
子供が遊べる施設が充実していない	3.61	1.92	3.79	1.92	3.00	1.80	201	3.70*
子連れのスタジアムまでの移動が大変である	3.66	2.17	3.51	2.00	2.70	1.84	248	6.24**
子連れで来ると施設の中での移動が不便である	3.89	2.18	3.50	1.93	2.56	1.64	241	11.61***
スタジアム内には授乳をする場所がない	4.76	2.22	4.03	2.27	3.10	2.22	110	5.17**
<スタジアム・サービス要因>								
子供を連れて来ることができる雰囲気でない	2.05	1.33	1.77	1.21	1.53	0.93	265	4.70*
子連れでの観戦をサポートするサービスが充実していない	3.67	1.72	2.85	1.64	2.51	1.71	251	9.25***

※ 各項目7段階尺度で測定。平均値は値が高いほど「そう思う」を示す。　　* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

b）社会心理的要因の末子年齢セグメント間比較分析の結果

表5は、7つの社会心理的阻害要因を末子年齢セグメント間で比較したものである。比較分析の結果、5項目においてセグメント間で有意な差が認められた。「子供をあずけて観戦することに罪悪感を覚える」では、「4－6歳」が他のふたつのセグメントと比べて高い値を示した。これは、この年齢層の子供が「7－12歳」と比べて母親について行きたがる傾向が強く、「0－3歳」と比べると自分の考えを持ち、自己主張する年頃であることを母親が意識しているためと推察される。「自分が観戦するために子供を預かってくれる人がいない」では、「0－3歳」と「4－6歳」のセグメントが「7－12歳」と比べて高い値を示した。この結果から、乳幼児期の子供の世話の大変さ故に、子供を預かってくれる人を確保するのが難しいと考える母親の意識がうかがえる。

また、「人が多くいる場所へ子連れで来ることに抵抗を感じる」「子供を連れてくると周りの人に迷惑をかける」「子供と一緒では子供のことを忘れて楽しむことができない」の子供と一緒にスポーツ観戦を行うことに関する3項目については、末子年齢層が低くなるほど、値が高くなる傾向がみられた。これは、子供と一緒にスポーツ観戦をしようとする時に、低年齢の子供ほど母親が子供にも周りにも気遣いが求められるという認識の表れと考えられる。

3つのセグメント間で差が認められなかった「子供を預けて観戦に来ると、子供のことが気になる」は、どのセグメントでも他の項目と比べて値が高く、一方、「観戦に子供を連れてきても夫が子供の面倒を見てくれない」はどのセグメントでも比較的に値が低い傾向がみられた。つまり、子供の年齢に関係なく子供をあずけてスポーツ観戦に来ると母親は子供を心配し、子供の年齢に関係なく子供の世話は夫婦でみる傾向が伺える。

全体的には、子供を預けることに関しては「4－6歳」セグメントの値が高く、子供と一緒に観戦することに関する要因では、低い年齢層のセグメントほど値が高い傾向がみられた。この結果から、末子年齢によって、母親が感じる社会心理的阻害要因が異なることが示されたといえよう。

表5 社会心理的要因の末子年齢セグメント間比較分析の結果

	0-3歳 (n=65)		4-6歳 (n=74)		7-12歳 (n=136)		d.f.	f 値
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	Mean	S.D.		
子供をあずけて観戦することに罪悪感を覚える	3.40	2.16	4.40	2.15	3.30	2.25	213	4.92**
人が多くいる場所へ子連れで来ることに抵抗を感じる	3.30	1.96	2.79	1.84	2.44	1.63	258	5.01**
子供を預けて観戦に来ると、子供のことが心配になる	4.50	2.12	4.94	2.28	4.43	2.19	227	1.15
自分が観戦するために、子供を預かってくれる人がいない	3.44	2.31	3.52	2.40	2.69	2.12	234	3.67*
観戦に子供を連れて来ても夫が子供の面倒を見てくれない	2.29	1.65	2.26	1.85	2.11	1.80	244	0.27
子供を連れてくると周りの人に迷惑をかける	4.25	1.83	3.23	1.89	2.52	1.58	260	21.08***
子供と一緒では子供のことを忘れて楽しむことができない	3.97	2.12	3.28	2.31	2.19	1.72	261	18.15***

※ 各項目7段階尺度で測定。平均値は値が高いほど「そう思う」を示す。　　* p<.05 ** p<.01 *** p<.001

4) 自由回答のまとめ

表6は、小さい子供を持つ母親がスポーツ観戦を楽しむために必要な事柄について自由記述で得られた回答を内容分析によって分類し、分類されたカテゴリー別のパーセンテージを示している。自由記述で得られた意見の数は、プロ野球観戦者が105、Jリーグ観戦者が80であった。全体的に多くの意見が得られたのは「託児所等の施設について（27.3%）」であった。その内容は、調査地であるふたつのスタジアム内の託児所の設置を評価する意見がある一方で、その存在を知らないという意見や、認知度の低さから託児関連施設の設置、子供を遊ばせながら試合を観戦できるスペースを求める意見が多くみられた。

「トイレ」については、子供はトイレに行くのを長時間我慢できないため、混まないように数の増加に関する意見がみられた。さらに、「オムツ替え・授乳スペース」は、その設置の徹底と使い勝手の良さを指摘する意見が多くを占めた。「施設・サービス」については、子どもが楽しめるイベントの充実を求める意見が多く、施設内の安全性や利便性を求める意見も少なくなかった。また、「座席」については、子供専用席や親子席の設置を求める意見が見られた。「その他の意見」としては、子供と観戦するときの苦労や、他者の協力の必要性かつ重要性を指摘する意見が多く、育児とレジャー活動を両立させることの難しさが浮き彫りにされた。

全体的には、託児所や子供を遊ばせるスペースの設置に関する意見が多くを占めた。子供を持つ女性がスポーツを観戦しやすい環境を整備するためには、施設や設備の整備が大きく求められている。その一方では、協力者の存在、子供を預けることへの心配、周りの観戦者への気遣いなど、社会的・心理的要因が密接かつ複雑に関連していることが自由記述から明らかとなった。

表6　自由回答の内容分析結果(%)

回答内容のカテゴリー	プロ野球(n=168)	Jリーグ(n=107)	全体(n=275)
託児所等の施設について	23.2	33.6	27.3
トイレについて	4.2	5.6	4.7
オムツ替え・授乳スペースについ	3.6	2.8	3.3
施設・サービスについて	11.3	13.1	12.0
座席について	7.7	10.3	8.7
その他の意見	12.5	17.8	14.5

※ 回答が得られた意見数:プロ野球105、Jリーグ80。表中の値は、回答者数を母数とするパーセンテージ

4. まとめ

本研究の目的は、12歳以下の子供を持つ母親のスポーツ観戦阻害要因を明らかにすることであった。特に、子供の年齢とスポーツ観戦阻害要因との関連を探るため、スタジアム施設要因、スタジアムサービス要因、そして社会心理的要因について、末子年齢セグメント間で比較分析を行った。その結果、次のようなことが明らかとなった。

まず、スタジアム施設要因とスタジアムサービス要因については、末子年齢が低いほどその整備状況や内容に関して不備を感じていることがわかった。一般的に、スポーツ観戦をするスタジアムは、子供連れの観戦者に優しい施設とはいえない。例えば、本研究の調査地のスタジアムのトイレにはおむつ替えシートが設置してあるが、多くの人があわただしく出入りするトイレのスペースで、しかも決して清潔とは言えない環境の中で乳児のおむつを替えることに抵抗のある人は多い。実際に、自由記述で得られた意見の中にも「特におむつ交換台の汚れ、臭いが気になる」や「おむつ替えシートの周りに人がいて邪魔になった」という意見もみられた。

次に、末子年齢によって、社会心理的阻害要因が異なることがわかった。0歳から3歳の乳児期の末子を持つ母親は、子供をスタジアムに連れてくることに対して抵抗を感じ、周りに迷惑をかけ、自分も楽しむことができないという思いが強い傾向がみられた。一方、4歳から6歳の幼児期の末子を持つ母親は、試合観戦のために子供を預けることに対して罪悪感を覚え、預かってくれる人もいないと考える傾向が強い。また、全体的に小学生を末子に持つ母親は、乳幼児期の子供を末子に持つ母親と比べてこれらの認識は低い傾向があった。

男女を問わずスポーツ観戦への関心が高まる中で、子供を持つ母親がスポーツ観戦を楽しめる環境整備は重要な課題である。また、プロ野球やJリーグを問わず、スポーツ観戦というレジャー活動を展開するスポーツ組織にとって、女性は大きなターゲットマーケットのひとつである。本研究で明らかとなったように、子供を持つ母親は施設やサービス、そして社会心理的にもさまざまな課題を抱えている。グリーンスタジアム神戸では、現在、家族でテーブルを囲んで試合観戦ができるファミリーシートを設置している。家族単位のスペースが確保され、周りの観戦者への気遣いも軽減でき、観戦を家族で楽しんでもらうための試みである。今後、スポーツ組織にとって託児所やおむつ替えスペースなどの施設をただ単に設置するだけでは十分とは言えない。本研究で明らかとなった母親の意識を理解した上で、利便性の高いサービスを充実させていくことによって、小さい子供を連れて安心して試

合観戦を楽しむことができる環境を整える努力がより求められる。

参考・引用文献

1）藤本淳也（1999）．オリックス・ブルーウェーブ観戦者調査自由回答に関する報告書．pp2－38
2）Haapasalo（1999）. Women and Sport. Olympic Review, XXVI（25）, pp.53－56
3）IOC（1999）. Olympic Movement's Agenda 21. International Olympic Committee, Sport and Environment Committee. p.43
4）こども未来財団（2001）．平成12年度子育てに関する意識調査事業調査報告書（概要版）．pp20－24
5）総理府（2000）．男女共同参画基本計画，p.87
6）SSF笹川スポーツ財団（2002）．スポーツライフ・データ2002：スポーツライフに関する調査報告書．p22. p44
7）WHO（2001）. Physiological Activity and Women's Health. pp.1－3
8）余暇開発センター（1998）．レジャー白書'98.